

第200号

平成23年2月10日

# 病院だより

200th Anniversary

200号発行を迎えて

梅田 清隆

瞳, 潤って知っていますか?

平井 香織

在宅療養に向けての援助

有村ひと美

国際親善総合病院

〒245-0006 横浜市泉区西が岡1-28-1  
TEL 045(813)0221 (代表)  
FAX 045(813)7419 (庶務課)

URL <http://shinzen.jp>

国際親善総合病院看護部  
モバイルサイト



## 200号 発行を迎えて

「病院だより」は今回、無事に200号を発行することとなりました。第1号は23年前の平成63年8月発行ですので病院がまだ中区相生町にある頃になります。平成2年5月の泉区への病院移転を第12号（平成2年6月発行）で迎え第73号（平成12年7月発行）からはそれまでの隔月発行を毎月の発行に変更。第115号（平成16年1月発行）からはB6版から現在のA5版に拡大して内容も多くお伝えするようになっています。今、読み返してみますと懐かしい先生の名前や当時の行事の事などが書いてあり改めて200号の時の重さを感じると共に当時より医療の事や病気の事を皆様に伝えようとする思いが伝わってきます。



発行の目的として第1号発行時より「病院の事を病院内、病院外に広く広報し病院と地域住民の方々とのコミュニケーションをはかる」と定めて現在もその目的は変わることなく情報発信を続けています。

### 病院だよりの構成は3部構成になっています。

**病院だより**：その時々々の病院の出来事、病気の事、医療の事等広く皆様に知っていただきたい事柄をタイムリーに掲載するようにしています。

**健康懇話会**：毎月第2金曜日に開催される健康懇話会に関連した情報を演者より紹介しています。

**院内散策**：病院の各部署の事を広く知って頂けるように部署紹介や関連した情報の発信を行っています。

この「病院だより」の企画は広報委員会で行っており、今まで以上により良い情報を500号、1000号とお伝えできるよう努力をして参りますので、皆様よりご意見・ご感想を頂ければ幸いです。



# 瞳、潤っていますか？

## —ドライアイのお話



悲しい時や嬉しい時、大笑いした時に流す涙。涙はいったどのような働きをしているのでしょうか？

涙は目と耳の間にある涙腺から1日2～3cc分泌されます。(1)目の表面(角膜・結膜)へ栄養を補給する、(2)瞼(まぶた)を円滑に動かす潤滑剤、(3)細菌・紫外線から目を守るフィルター、(4)雑菌を洗い流すといった役割を果たしています。

涙の分泌量が減少したり、涙の質が悪化したりする病気はドライアイ(渇き目)と呼ばれ、目の表面の乾燥や傷に伴って異物感や痛み、目の疲れなど様々な症状を引き起こします。

ドライアイは、シェーグレン症候群や膠原病、糖尿病などの病気とともに合併して発症するだけでなく、加齢や飲み薬による涙液量の減少、コンタクトレンズやコンピューター作業による瞬きの減少、マイボーム腺機能不全による涙の蒸発亢進、結膜や瞼のたるみなどにより、涙をうまく眼目の表面に維持できない事によって引き起こされます。

治療としては、まずは人工涙液による涙液の補充、ヒアルロン酸点眼による角結膜の保護、眼表面の炎症の安定化、涙点プラグ、外科的手術など、症状によって組み合わせて行います。当院では、点眼などの保存的治療で充分効果が得られない場合は、涙が鼻へ排出される出口(涙点)に蓋を閉め、少ない涙を有効に使う「涙点プラグ」を積極的に行い良い治療効果を得ています。

ドライアイは渇きの自覚症状だけでなく、角結膜の感染症、視機能の低下を伴う様々な不定愁訴の原因となります。空気が乾燥する冬は特にドライアイの症状が悪化しやすい時期です。目に違和感を自覚されている方は、一度眼科外来を受診なさる事をお勧め致します。症状に合わせて様々な治療、対処法がございますのでご相談下さい。

眼科部長 平井 香織

## ご案内

このテーマは

平成23年3月11日(金) 15:00～約1時間の健康懇話会にて

講演予定です。

(入場無料、予約不要、どなたでもご自由にご参加ください。)



## 在宅療養に向けての援助

2 A病棟は、消化器外科・呼吸器外科など外科系疾患の患者さんが多く入院される病棟です。手術だけでなく検査目的の方や、がん化学療法目的の方など、さまざまな目的で入院されており入退院の多い病棟です。スタッフは、医師、看護師、病棟薬剤師などコメディカルを含め約40名で、それぞれの専門性を活かしてより良い医療を提供できるよう自己研鑽に励んでおります。



現在、日々の看護の中で特に力を入れていることは、長期療養が必要となるがん患者さんの在宅療養に対する援助です。住み慣れた自宅で家族とともに過ごすために、在宅療養を希望される方が増えています。

しかし、その思いの裏側には、「緊急時にはどうしたらよいか、点滴や薬の管理はどうしたらよいか」などの不安を抱えており、社会資源のサービスについても詳しく知られていないのが現状です。そこで私たちは医師・病棟薬剤師・緩和ケアチーム・地域医療連携室などと連携し、さまざまな情報の提供を行っています。そして患者さんやご家族の不安が軽減され、なるべく負担が最小限となるよう在宅に向けての援助をさせていただいています。

最近では核家族化が進んでいる為、介護の担い手が少なく、自宅への退院はどうしてもご家族の負担が大きくなります。そのためにも入院中に退院後の生活をイメージして、患者さんやご家族と同じ視点で考え、一つ一つの不安を解決していくことが大切であると考えています。少しでもよりよい時間が過ごせるよう支援していくことが、私たちの目標です。

何かありましたら小さなことでもご相談していただけたらと思います。患者さんにとってよりよい方法を一緒に考えていきましょう。